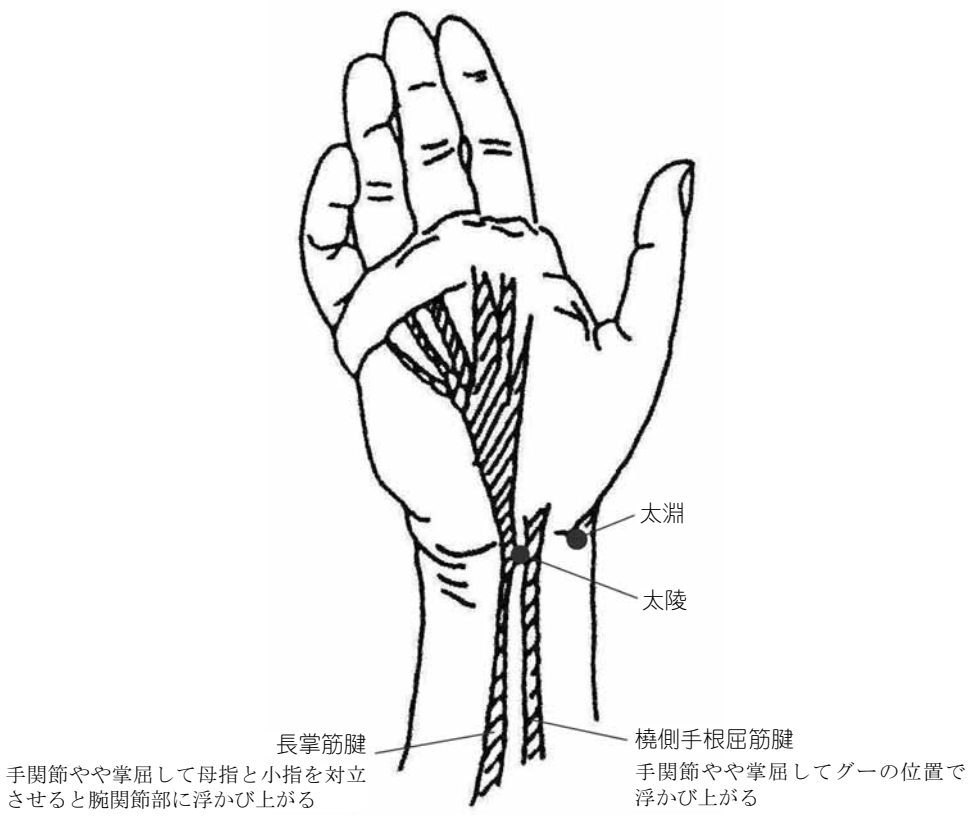


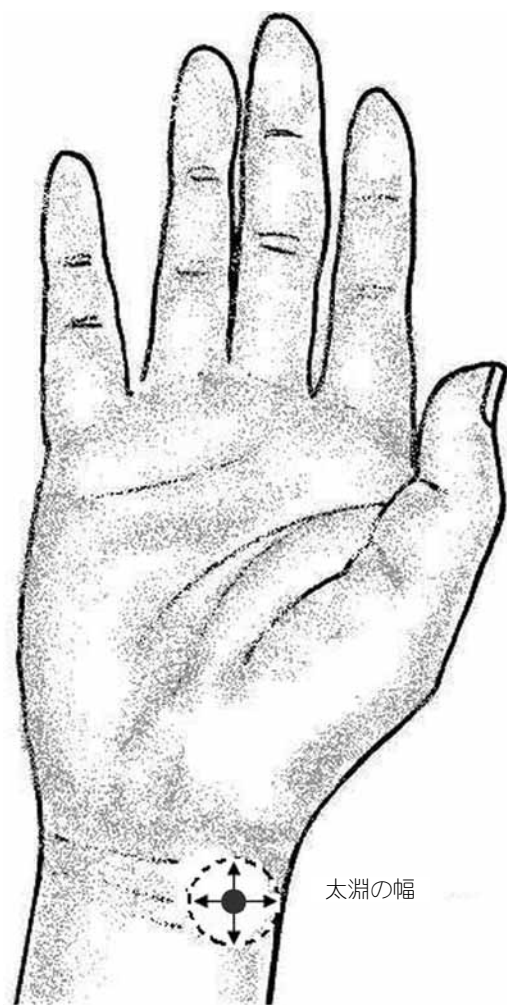
たい えん
太淵

要 穴 兪土穴、原穴、脈会。
穴 処
【北辰会】 手関節前面横紋の橈側端の陥凹部、動脈拍動部に取る(図 1-13)。
【WHO】 手関節前外側、橈骨茎状突起と舟状骨の間、長母指外転筋腱の尺側陥凹部。
 中心はここ(図 1-14)ですが、極端に言えば、これくらいの幅があります。
 魚際もそうですよ。

▶太淵の反応
 太淵は少し幅がありますので、橈側に偏ったり、尺側に偏ったり、遠位あるいは近位に偏るなど色々します。取穴もまた、上手下手がある。下手だとおそらく分からないから、ここいらにブスとやる。それはそこそこ効きますよ。しかし、「一流の鍼医者になろう」と思えば、まあ一点をどう捉えるか。
 極端な事を言えば、芥子粒程まで、意識して



(図 1-13)



(図 1-14)

捉えられるかということです。これは難しいけれども、今言った単純な観察を丁寧にやっていく中で、だんだんときめ細かくなっていき、穴処の取り方が上手くなります。

ツボの効能から言いますと、効くか効かないかは貴方の責任です。

太淵は(図 1-14)のように幅をもって診た方がよい。その場合の診方で、**労宮**の敏感な人が

ちょっと探れば、「外側に寄ってる、内側に寄ってる」など分かります。分からない場合は、示指などの敏感な指の先で触っていく。

微妙にウェットであったり、ドライであったり、あるいは皮膚が緊張したり、弛緩したりします。それも浅い所と深い所は、ちょっと違う。原穴でそれが分かるようになると、かなり達人です。最低 30 年以上やらないと駄目ですね。

主治

▶ 肺気不宣、肺気虚

肺気の留滞を、肺気不宣と中医学では言いますが、その肺気不宣に有効な穴処であります。

原穴ですから、原気に関わります。肺気虚を中心とする、肺の正気の弱りに対して非常に有効です。

ここは**魚際**とか**少商**のように、熱を泄らしたりするのは、不便な処です。肺気不宣。肺気が通じ難い、肃降作用がうまく働かない。あるいは肺の機能そのものが減弱して、呼吸困難とか肺気虚みたいなものを起こす場合に使うわけです。

刺鍼

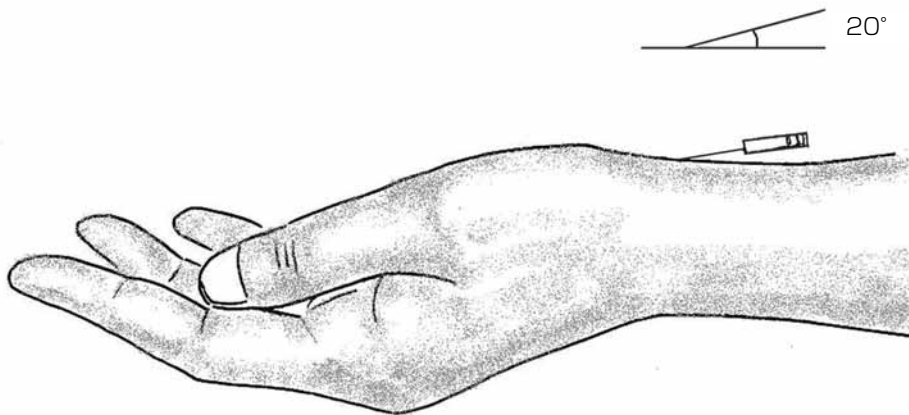
▶ 毫鍼

直刺も使いますが、多くは横刺になります。その場合の方向は、当然、体幹から末梢に向けて刺します。

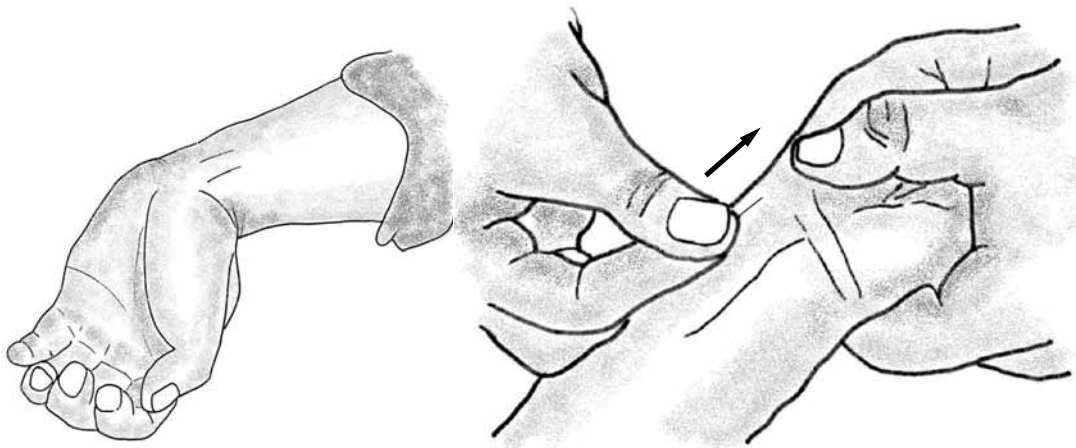
あまり迎随の補瀉は言わないけれども、迎随を意識する面としない面とがあります。

手首を伸ばして、**少商**の方向に刺す。角度は、大体 20 度くらい。20 度で、1～2 分。深くとも 3 分まで。斜めに横刺です(図 1-15～17)。

それで非常に効果が上がります。



(図 1-15)



(図 1-16)

(図 1-17)

▶ 刺鍼による正邪の弁別

この穴処で、邪気とか正気の動きが分かれば大したものですが、なかなか難しい。私でも難しいので、この穴処ではあまりそういうことはやらない。

正直でしょ？ 分からないことは、分からないとする。分かったことは分かったとする、これが非常に大切なのです。

医学・科学をやる場合には、嘘をつかないということがいかに重要かということです。嘘をつけば、自分をも欺いていきます。絶対分かったことは分かったとするし、分からないことは分からないとしましょ。

太淵の場合は非常に難しいです。

したがって、私はここでは肺気の動きというのは捉え難いと思っております。



(図 1-18)

将来、腕が上がれば、変わるでしょうが。

▶ 撓入鍼法^{とうにゅう}

ツボに対する鍼のアプローチですが、北辰会が今使っているのはほとんどが柳葉型です。松葉型というのはご存じのように、^{くだばり}管鍼を使う場合にやりやすい。パンパンと叩いて入れる。

柳葉型とか、それからスリオロシ型というのはほとんど撓鍼用だと言われていますが、北辰会は圧入しているから、押さえただけでも軽く入れてしまうんです。

その時の皮膚の抵抗感は皆違うわけですね。それをずーっと自分で刺して行って、どういう感覚が起こるか。

どちらかという、瀉法とか清熱の場合は、少しピンと響くような感覚。

「ガーン、ワーッ」と嫌な感じがするようなのは駄目ですよ。「ほんの少し響いとるな」という感じが一番良いのです。

言うだけでは非常に感覚的な問題が難しいけれども、受ければ分かる。下手な人の子を受けると絶対に嫌な感じしか起こらないのです。

太淵に刺すのであれば、少し鍼先をこう斜めにして、少し皮膚を引っ張るようにする(図 1-18)。

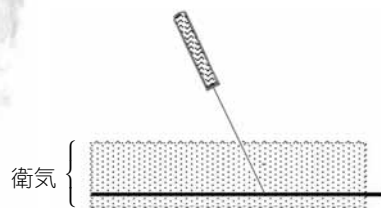
皮膚に対して鍼をただ刺そうとして、鍼先から突いていくようにするだけならば、当然痛いんです。鍼先を斜めに持ってきて……、刺す場合に、少し皮膚を手前に引くんです。これが術です。そして、それを少し放すようにすると、皮膚が元の位置に戻そうとするから、勝手に皮膚のほうから刺さるんですね。これが押手なしで



(図 1-19)



① 衛気を乱さないように
鍼先を皮膚に接触させる



(図 1-20)

刺す、撓入鍼法という独得の刺し方なんです(図 1-19 ~ 22)。

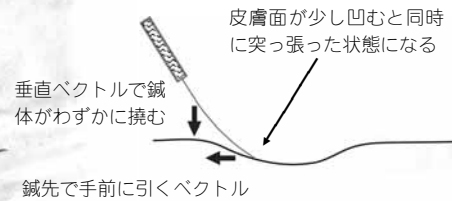
よく鍼をやる場合の基本を学校では、「押手が弱くて刺手がキツイと痛みますよ」と言いますが、同じことなんです。我々はもう押手は使わない。使わないで刺すやり方ですが、原理は一緒です。皮膚の方から刺さるようにもって

いけば、ほとんど痛みはないはずです。

その場合に鍼先の形が非常に重要なので、我々は柳葉型の鍼ですね、これを推奨しております。これはタフリー社から「蓮風鍼」として売り出されていますが、今我々が使っているものは大体そういう形です。ちょっと触れるだけでスッと刺さるようにね。そういうデリケート



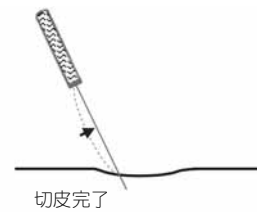
② 刺手の圧でしっかり固定し、鍼体をわずかに撓ませながら手前に少し皮膚ごと引く（まだ切皮はしていない、鍼先が衛気に馴染んでいる状態である）。



(図 1-21)



③ 刺手はそのまま鍼体の撓みが元に戻る力を利用して、突っ張った皮膚面に刺入（皮膚面からも鍼に無理なく刺さるので無痛）。



(図 1-22)

な刺し方をして下さい。詳細は『東洋医学 鍼灸ジャーナル』vol. 11, 12「撓入鍼法実技解説 I・II」を参照されたい。

▶ 古代鍼① (p.482「蓮風古代鍼」)

古代鍼を使う場合は、また別です。これは軽く当てるわけですから、補法の場合はフーッと、フーッと温もりをもったところで、パッと取り

ます。

魚際や少商に古代鍼で瀉法をする場合は、軽く銀鍼でポンと叩いて、その部分にヒンヤリした感じが、患者に起こる。

上手くやると術者が手を触れて、「冷えたな」という感じが得られる。熱を泄らし、実邪を下すという形になります。



(図 1-23)

古代鍼の補法の場合はフーッと軽く触れて、熱感が残ったらスーッと取る。

古代鍼で瀉法の場合は、出血するほどやっただらいけないので、あまりキツクやらない。軽くやっても、皮膚がデリケートで出血する場合がありますけれども、これはまずいです。軽くポンと打って、ポンと凹んで、スッと抜くような形でやると、充分、瀉法が効きます。

その場合、本当に瀉法が効いておれば、脈が細くなります。大体、全身の元気に関わるような瀉法をやった場合は、押し切れの脈が有力であったのが、細くなるのが特徴です。

▶古代鍼②

古代鍼を使う場合は、補法であれば当然これ

は先程の毫鍼と同じように、こちらからソッと金鍼で当てる(図 1-23)。あるいは、側に持っていくだけで効かせております。

脈をよく診ておれば分かります。太淵の発汗の状態を観察することでも分かります。

▶置鍼時間①

毫鍼の置鍼は、長くとも10分まで。もちろん脈が速くて、一息5至6至になると5分まで。

脈の速さに合わせて、気の循環が分かれますから、「脈が今日は速いな」と思ったら、患者が慌てて来た場合は、10分くらいは寝かせなくてはいけない。10分寝かせても速い場合は、何らかの理由で正気が弱っていたり、邪実が激しくなっているから、脈が速いわけです。

即ち、気の循環が速いから、置鍼時間は短いわけです。これを覚えておいて下さい。どんな穴処でも基本は同じです。

▶置鍼時間②

良い鍼をしますとコロッと一瞬で変わりますから、脈診の上手な人は診て下さい。

置鍼時間は、ここでは10分と言っていますが、ケース・バイ・ケースです。

最近(2009年)では、一穴に30分、場合によっては1時間程刺す場合があります。置鍼時間というのは非常に大きな意味を持ちます。

人によっては3分以上やると、逆に気虚を起こします。およそ、5～6分から10分というのが基本になっているけれども、人によってはもう1～2分でスッと抜いてしまう。または30分近く刺すといったことも沢山あるんです。実際これも型に嵌まってないんですね。

▶補瀉と番数①

また、太淵ではあまり瀉法はやらないということも述べておきます。せいぜい、肺気の留滞。まあ、肺気の留滞と言ったら、実になりますけれども、軽い肺気の留滞、肺気不宣。それから、肺気虚を補う。

刺入角度は、大体20度くらい。番数は、1番から、太くとも5～8番。本当に上手になると、太い鍼で補法ができれば一番効きます。ところが下手すると、ものすごく気を泄らして悪化するから細い方がやりやすい。

本当の名人は、太いので補法をやります。特に、今、私が気にしている韓国の鍼。『藏珍要編』は、太い鍼でもって補法をやっている。これは、やはり名人でないといけないですね。できる技があれば、太い鍼の方が補法にも瀉法に

も効くと明言しておきます。これは、補瀉論に出できますね。

皆さんがやられるのであれば、1～3番鍼くらいが無難でしょう。

▶補瀉と番数②

一定のことは言いましたが、本当に上手い人は太めの鍼を巧みに使ってパッと気を集めたり散らしたりします。それが難しいから細い鍼をやらせているわけです。

本当に上手くなってくると、少々太くても全然痛くないです。しかもパッと気を散らしてしまいます。あるいは気をスッと集めてしまいます。そういうことが自由自在です。中国の鍼みたいな手技に凝らない。凝る必要はないですよ。

上手く刺入ができれば、それがそのまま術になります。基本は先程から言っているように、気を集めるか散らすか、これが補瀉です。

ツボにアプローチする場合、ツボを触れますね。その場合、人によってはキツク揉んだり叩いたりするけれども、そうではなく軽く触れてやる。「患者さんの手が温まるかな？」という感じで触れて、そこにパッと刺す。

触れるということは、ちょうどお風呂に入る時のかかり湯みたいなものですな。

パッと湯船にそのまま入ったらショックがキツイから、かかり湯というのをやりますね。あれと同じ要領で、皮膚に「これから刺しますよ」という挨拶をする。「さあ、鍼を入れますよ」という感じですね。鍼をする前に揉む、前揉法。鍼をした後の後揉法、気が漏れないように揉む。

前揉法というのは、「これから鍼を刺しますよ」という生体の側への挨拶です。挨拶なしと挨拶ありとでは、全然反応が違います。